

老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、
また児等を思ふ歌七首

八九七番

たまきはる うちの限りは 平らけく 安くもあ
らむを 事もなく 喪なくもあらむを 世の中の
憂けく辛けく いとのかきて 痛き傷には 辛塩を
注ぐちふがごとく ますますも 重き馬荷に 表
荷打つと いふことのごと 老いにてある 我が
身の上に 病をと 加へてあれば 昼はも 嘆
かひ暮らし 夜はも 息づき明かし 年長く 病
みし渡れば 月累ね 憂へ吟ひ ことことは 死
ななと思へど 五月縄なす 騒く子どもを 打棄
てては 死には知らず 見つつあれば 心は燃え
ぬ かにかくに 思ひ煩ひ 音のみし泣かゆ